

二人は急いで歩き始めた。しばらく歩くと、空から白いものがちらちらと降ってきた。やはり雪が降ってきたのだ。雪はどんどん激しくなった。あつという間に地面が雪で白くなった。二人とも、心の中で同じことを思っていた。

—— 今晩は大雪になりそうだ。ああ、寒い。舟に乗りたくない。そして、家に帰りたい ——

二人は黙って歩いた。川に着く前に、もう辺りは一面雪で真っ白になっていた。遠くの山も木もみんな真っ白だ。

やっと川に着いた。渡し守がいつも客を待っている小屋も真っ白だった。

「あつ！ 舟がない」

二人は小屋の戸を開けた。しかし、その小屋に渡し守はいなかった。渡し守は、雪がたくさん降ってきたので、仕事をやめて帰ってしまったのだらう。

ページ見本

杜子春は、一晩で洛陽で一番の大金持ちになりました。あの老人の言葉通り、自分の影の頭のところを、夜、掘ってみたら、大きな車にいっぱいの金が出てきたのです。

大金持ちになった杜子春は、すぐに立派な家を買いました。そして、世界中の珍しいもの、有名なものを買いました。高い酒や食べ物、目に四回色が変わる花、外国の美しい鳥、いす、車、服……。

すると、これを聞いて、今までは道で会ってもあいさつもしなかった人たちが、毎日遊びに来るようにになりました。その数は毎日増え、とうとう、町で杜子春の家に遊びに来ない人は、一人もいなくなりました。

杜子春は、この客たちと毎日酒を飲みました。杜子春が、金の茶碗で西洋の珍しい酒を飲んでみると、目の前で、インドの魔法使いが魔法を見せたり、髪にきれいな花を飾った女たちが、その周りで、踊ったり歌ったりしました。



ページ見本



ある日、母は、ほくと民子に山の畑の綿を採ってくるように言った。母の言葉に、ほくも民子も驚いた。ほくも民子も、心の中ではとてもうれしかったが、その気持ちを外には出さなかった。喜んでいられるのが嫌だったからだ。きっと兄の妻やお増は、母やほくたちがいないところで、「お母さんは何を考えているか本」。あの二人を一緒に山の畑に行かせるなんて」と言っているだろう。

二人はなかなか出かけようとしなかった。母は二人を急がせた。

「早く行きなさい。山の畑までは遠いのだから、早く行かないと帰りが遅くなる。夜にならないうちに帰ってくるんだよ」

そして、お増に、二人の弁当を作るように言った。

二人は一緒に出かけるところをだれにも見られなくなかった。ほくが少し早く出かけ、村を出たところで、後から民子が歩いてくるのを待った。民子が来ると、二人は一緒に歩き始めた。今日は急いで綿を採って、面白いことをして遊ぼう、などと話しながら歩いていった。道の両側にいろいろな草花が咲いている。その中に野菊の花があった。

## 見本

「民さん、ほら、野菊」

ほくは足を止めたが、民子は聞こえないのか、どんどん歩いていく。ほくは野菊を採った。民子はしばらく一人で歩いていたが、政夫がいなことに気づいて、急いで戻ってきた。

「政夫さん、何をしていたの？ ……まあ、きれいな野菊。私、本当に野菊が好きなの。半分、私にくれない？」

ほくは野菊を民子に渡した。

「ほくも前から野菊が大好きなの」

「私、野菊を見ると涙が出てくるの。なぜだかわからないけど、不思議なくらい野菊が好きなの」